

福田晃先生の学問

二〇二三年一月九日、立命館大学名誉教授の福田晃先生が亡くなられた。九十歳の誕生日を目前にされてのご逝去であった。

先生は一九三二年一月二十六日、福島県会津若松市でお生まれになった。一九五〇年三月に高校卒業後、五年間の社会人生活を経て一九五五年四月に国学院大学文学部入学。一九五九年三月卒業後、同大学大学院文学研究科日本文学専攻修士課程に進学。一九六二年三月に同課程修了、引き続き博士課程に進学。一九六五年三月、国学院大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程を単位取得（大学院在籍中には東京都立三田高校・同足立高校教諭として勤務）。同年四月より大谷女子短期大学助教、翌年四月より大谷女子大学専任講師、一九六八年四月より同大学助教を歴任、一九七一年四月に立命館大学文学部助教として着任された。その翌々年四月教授昇任、その後一九九七年三月に定年退職を迎えられるまで長年にわたって立命館大学文学部の研究・教育に尽力された。同年四月には名誉教授、そして特任教授として引き続き指導に当たられた（特任教授は二〇〇二年三月退任）。そ

の間、一九八五年三月には国学院大学より博士学位を取得されている（学位論文は「神道集説話の成立」。一九八三年五月、三弥井書店より七八頁の大著として刊行）。

先生のご研究は国学院大学大学院文学部四年生次の卒業論文のテーマとして恩師臼田甚五郎氏から「諏訪縁起」の一本『諏訪明神縁起』を貸与されたことに始まる。大学院進学後も甲賀三郎譚を追い求めて甲賀・信濃を調査し、その伝承管理者が諏訪信仰を布教する陰陽師系の巫祝集団だったことを明らかにされた。このように、先生の研究テーマは文字文芸が宗教者集団の管理してきた伝承説話をもととして成立したものであることを解明することであった。こうしたところから、次に巫祝集団の死霊鎮魂と関わる「曾我語り」などの軍記物語や「小栗語り」などの説経の問題へと向かわれた。また、昔話の調査・研究に携わられたところから、甲賀三郎譚の話を世界各地の類話と比較して原話を想定し、「諏訪縁起」の成立過程を推定された（こうした説話の国際比較の問題は鍛冶文化と関わる炭焼き長者譚や馬の文化と関わる

真 下 厚

英雄叙事詩の国際比較の研究に繋がってゆく。昔話と「御伽草子」との関わりも研究テーマとなった。さらには、奄美・沖縄地域における民間文芸の調査・研究も先生の研究に大きな展開をもたらした。奄美ユタが保持する日光感精神話の巫祖祭文は中世の巫祝集団が伝承したであろう祭文の実態を推定し、『神道集』説話の成立を論じられる上での大きな手がかりの一つとなった。また、先生が直接取材された奄美ユタや宮古カンカカリヤーの成巫譚は折口信夫「国文学の発生 第一稿」(『古代研究 国文学篇』所収)を進展・深化させる核心的な資料となった。奄美・沖縄地域、いわゆる「南島」の伝説・昔話は本土地域のそれと内容や性格、伝承形態などにおいて異なるところがあり、調査を中心的に進められるなかでこれも大きな研究テーマとされることとなり、その研究成果は『南島説話の研究 日本昔話の原風景』(法政大学出版局、一九九二年)として結実した。

先生は定年ご退職時に「伝承の「ふるさと」を歩く 日本文化の原風景」(おうふう、一九九七年一月)・「神話の中世」(三弥井書店、同年同月)・「神語り・昔語りの伝承世界」(第一書房、同年二月)という三冊の著書を刊行されたが、その後先に記したような研究テーマをそれぞれ進展させて、七十歳代には『曾我物語の成立』(三弥井書店、二〇〇二年)、『神語りの誕生 折口学の深化をめざす』(三弥井書店、二〇〇九年)、八十歳代には『昔話から御伽草子へ 室町物語と民間伝承』(三弥井書店、二〇一五年)、『放鷹文化と社寺縁起 白鳥・鷹・鍛冶』(三弥井書店、二

〇一六年)として結実され、次々に刊行された。そして、学位論文では『神道集』所載説話成立を追究されたのであったが、八十五歳時に刊行された『安居院作「神道集」の成立』(三弥井書店、二〇一七年)では複雑な神仏習合思想の系譜を辿って作品の編纂・編者の問題に迫られた。

そして、ご逝去の前後には『英雄伝承の誕生 蒙古襲来の時代』(三弥井書店、二〇二一年十一月二十四日)・『日本と「琉球」南島説話の展望』(法蔵館、二〇二二年一月十五日)。なお、先生のお手元には前年十二月二十日に届けられた)の二書を刊行されている。『英雄伝承の誕生 蒙古襲来の時代』は百合若説話・甲賀三郎譚の国際比較を通して浮かび上がる日本の英雄伝承の独自性を蒙古襲来を機とする日本の神仏習合思想の変貌との関連において論じられたもの。『日本と「琉球」南島説話の展望』は『南島説話の研究 日本昔話の原風景』と一対をなすというべきもので、日本中世の伝承のなかに「琉球」の伝承を位置づけようとしたもの。その共通する伝承基盤として鍛冶文化が取り上げられている。これら二冊の大著を重厚な日本文化論として遣された。先生はこうして、最後まで研究者として生きた。

先生は常に新たな研究を切り拓いてこられた。一九六〇年代、作者の個性表出とする文学観にもとづく研究が学界の趨勢であった日本古典文学研究の世界にあつて「非文学」と貶められるような『神道集』をはじめとする伝承文学研究に携わってこられ、その成果を積み重ねられたことによって、学界においてもこうした

研究が認められて大きな流れとなっていた。後年、先生が中心となつて企画・編集された『講座 日本伝承文学』全十卷（三弥井書店、一九九四～二〇〇四年）はその大きな潮流の成果である。

昔話・伝説などの民間説話研究においても、それは著しいものであった。一九六八年四月、先生と稲田浩二氏が編者として刊行された『蒜山盆地の昔話』（三弥井書店）は昔話集として画期的なものであった。市町村地域の悉皆調査に近いきめ細かな調査を実施、民間説話を語られたままに本文化、その一部を収録した音声資料添付、詳細な解説を収録などの点において従来の昔話集にはみられなかったもので、その後の昔話研究の学術資料たり得るものとなった。先生は昔話調査を前任校の大学で学生たちへの教育の一環として取り入れたとお聞きしているが、学生を率いての最初の調査報告書が新たな研究領域を拓く学問的意義あるものだったのである。なお、教育の一つとしての昔話調査は本学においても続けられ、ゼミの受講生に呼びかけて説話文学研究会を創設され、鳥取県日野地方や石川県白山麓地方など各地の調査に赴かれてその報告書を刊行しておられる。

復帰翌年の一九七三年夏から行われた沖縄各地の民間説話調査においても大きな成果を挙げられた。沖縄では市町村単位の地域調査がいまだ行われておらず、岩瀬博氏や遠藤庄司氏（本学卒業生、元本学会会員）とともに調査を組織して実施された。その後、調査組織は変化することとなったが、その調査報告書（奄美

地域を含めた）として「南島昔話叢書」全十卷（同朋舎出版、一九八三年）を企画された。これも学術資料にふさわしい書物であることを意図され、土地のことで語られたそのままを本文化し、それに共通語で対訳が付されている。声のことは重んぜられてのことであった。これらの調査を踏まえた研究成果が先に触れた『南島説話の研究 日本昔話の原風景』である。また、これらの民間説話の分類案を構想され、『日本と「琉球」南島説話の展望』にはその分類案が掲げられている。

一九八二年から一九九〇年まで刊行された『日本伝説大系』全十五卷・別巻二卷（みずうみ書房）も日本の伝説研究において大きな画期をなすものであった。

このように、先生は新たな方法を生み出し、新たな分野を切り拓く先駆者、開拓者として長年研究を続けてこられたのである。

先生の研究スタイルの一つとして共同の研究の場、共通の研究の場を重視し、多くの研究会・学会を設立してこられたことが挙げられる。大学院生だった一九六〇年にはむつひ会を六人で結成され、これは一九六三年に伝承文学研究会と名称を変えている。一九六八年には昔話研究懇話会設立の中心の一人となられ、一九八九年の学会化（日本昔話学会となる）においてもその中心になって進められた。一九七七年には奄美沖縄民間文芸研究会を中心になって設立、二〇〇〇年の学会化（奄美沖縄民間文芸学会となる）においてもその中心であった。一九八二年には説話・伝承学会、一九八四年には巫覡首僧学会を中心となって設立、また一九

九一年には唱導文学研究会を設立された（論集『唱導文学研究』が三弥井書店より一九九六年から二〇一九年まで計十二集刊行されている）。先生は「同志を募る」と表現されたが、このように研究仲間を募って学界に大きな潮流を作ってこられたのである。まことに大きな存在であった。

最後に、本学会に関することについて記しておきたい。

一九九一年、先生は三年後に学会創立四十年を迎えることからその記念事業計画を提案された。事業案の柱は本誌の年二回刊行と記念大会の開催というものだった。当時、学会は財政難のため本誌を年一回しか刊行できなかった。先生は常々、大学院生・卒業生の論文発表の機会が少ないことに心を痛めておられ、その機会を増やしたいと考えられたのだった。そして、本誌の刊行費を捻出するため、記念事業の募金を会員の方々に呼びかけて三年間で三百万円を集めて基金にすれば年二回の刊行は可能だということであった。この当時、郵便局の定期預金利息は年率約五パーセントと高く、その利息分を学会財政に組み込めば年二回の刊行はたしかに実現可能と考えられた。そこで、先生の案をもとに立てられた創立四十周年記念事業計画案が評議員会・総会において提案されて承認された。同年十一月、記念事業を前倒しするかたちで本誌は年二回刊行されることとなったのである。この高利息は数年間維持されて基金としての役割を十分に果たし得たが、その後の経済状況の変化によって残念ながらかなわなくなってしまう。しかし、その少し前から文学部からの補助が行われるように

なったこともあり、今日まで年二回の刊行が継続している。これは先生のこうしだした思いから始まったのである。いまではこの間の事情をご存じの方もほとんどおられなくなったことであるし、公式の学会史には書かれないであろう事柄でもあるので、この機会に記しておくこととした。（なお、本誌刊行の創立時からの変遷については本誌第六十一号の拙稿「立命館大学日本文学専攻・日本文学会年表」をご参照いただければ幸いです。）

このように、先生の生涯はまさに研究一筋というべきものであった。

（ましも・あつし）